

簡易懸濁法における 崩壊懸濁試験及び通過性試験

1. 試験目的

バロジピン錠10について、簡易懸濁法での適用が可能かどうかを検討する為、崩壊懸濁試験及び通過性試験を実施したので報告する。

2. 試験材料

バロジピン錠10 Lot. 322202 大洋薬品工業株式会社

3. 測定方法

崩壊懸濁試験: ディispenser内に1錠入れ、55℃の温湯20mLを吸い取り、5分間自然放置した。5分後にディispenserを90度で15往復横転し、崩壊・懸濁の状況を確認した。5分後に崩壊しない場合、さらに5分間放置後、同様の操作を行った。

通過性試験: 崩壊懸濁法で得られた懸濁液をディispenserに吸い取り、経管栄養チューブの注入端より2~3mL/秒の速度で注入し、チューブのサイズ、8、12、14、16、18フレンチ（以下Fr. とする）による通過性を観察した。

4. 試験結果

崩壊懸濁試験の結果を表1に、通過性試験の結果を表2に示す。バロジピン錠10は、10分間の自然放置で温湯に懸濁したが、フィルムが一部ディispenser内の側面に付着していた。その懸濁液は8Fr. のチューブを通過した。

表1 バロジピン錠10の崩壊懸濁試験結果

品目名	崩壊・懸濁状況
バロジピン錠10	10分以内に懸濁した。

表2 バロジピン錠10の通過性試験結果

品目名	最小通過サイズ
バロジピン錠10	8Fr. チューブを通過した。

5. 結論

バロジピン錠10は温湯に対して懸濁し、最小サイズのチューブを通過したが、チューブの十分な洗浄が必要と考えられる。なお、本製剤は、マクロゴール6000を含有する製剤である。マクロゴール6000含有の製剤は、マクロゴール6000が56~61℃で凝固するため温度を高くしすぎるとチューブに入る前に固まる恐れがある¹⁾。本製剤につき簡易懸濁法を適用する場合は、55℃より少し温度が低くなってから崩壊させることが望ましいと考えられる。

参考文献

1) 倉田なおみ：タケプロン（ランソプラゾール）OD錠の利点-経管投与と中心にして-, 薬局, 56(10) : 83-86, 2005.